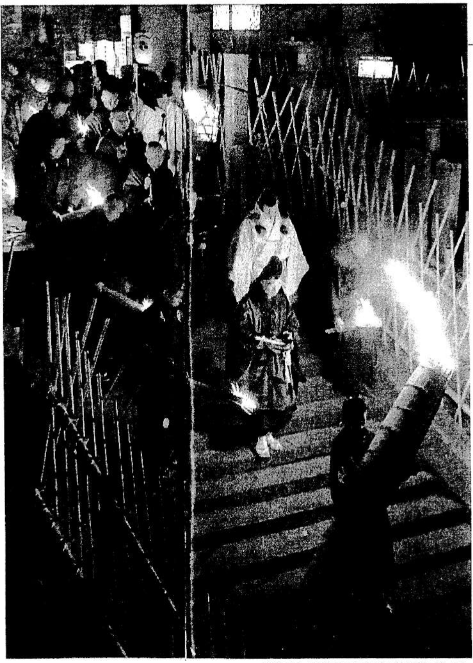
# 声明、松明が五感を刺激

## 「お水取り」に魅せられる女性たち

1260年以上、一度も途絶えることなく続いてきたという、
東大寺の「お水取り」。
厳寒の奈良で行われる法会に引かれて、
毎年のように訪れる女性たちも増えている。



暗闇の中、咒師松明を先頭に若狭井へ向かう。光、音、熱が聴聞者の五感を刺激する

3月とはいえ、震えるような寒さの東大寺二月堂（奈良市）。深夜の暗闇の中に、灯火の光が浮かび上がり、練行衆（修行僧）の姿が影となって動いていく。声明が始まると、堂内の空気は振動で震え、寒さをこらえて待っていた聴聞の人々を包むように響く。

「幕に映る影から、内側での行を想像したり、声明や物音に耳を澄ませたりしていると、感覚がするどくなる気がします。だんだんとトランス状態になるような（笑）。日ごろの会社や家でのストレスも消え、非日常の中で、自分の心まで清められていく感じがするんです」

と話すのは、東京在住の会社員えりさん（52）。古都・奈良に春の訪れを告げる行事として知られる東大寺・修二会（旧暦2月に行われる法会＝仏法行事、通称「お水取り」）を毎年聴聞するようになって10年以上になる。お水取りといえば、火の粉を振りまきながら運ばれる「お松明」が有名だが、堂内で行われる深夜の行を聴聞する女性も増えているのだ。

「お水取りは宗教儀式ではありますが、パフォーマンスとしても、とても優れていると思います」（えりさん）

### 絵巻物のような美しさ

お水取りは春迎えの法会であり、世界平和、人々の幸福を願うもの。東日本大震災が起こった2011年は、被災者への慰霊の祈りが付け加えられた。2月中旬から精進潔斎が始まり、3月1日から2週間、二月堂での本行が行われる。その間、正午から夜半過ぎまで行が続くのだが、闇の中に松明や灯火といった光が使われ、声明、五体投地、所作によって起こる足音などが響く。燃える杉の葉や香のかおり、皮膚に感じる炎の熱などが五感を呼び覚ますのだ。えりさんが魅了されたのは、こうした一連の行の世界だ。

「夜、修行僧の方々が上堂するときの様子は、沈黙の中を松明の光や匂いが先触れとなって描かれる、絵巻物を見るように美しいんです」

と話すのは、東大寺にほど近い場所に住む水本啓子さん。10年ほど前からお水取りに通っている。京都から毎年通う岩井敏子さんも同様だ。

「最初はお松明を見るだけだったのですが、局（お堂の周囲の畳敷きの部分）にあがってうかがう声明や錫杖の鈴の音などが素晴らしくて。達陀などの行も印象的ですし、知れば知るほど、奥が深いんです」

お水取りでは、女性が聴聞できるのは格子越しの「局」から。ここから堂内の行の様子をうかがう。「香水給り」の時には格子越しに手を差し出す

### 「青衣の女人」の伝説

行をおこなうのは、練行衆と呼ばれる11人の僧侶たち。和上、大導師、咒師、堂司の四職（各1人）と7人の平衆が毎年選ばれる。

毎年のように通っている人たちは、こうした練行衆の顔ぶれの変化や、声明の声についても自分なりの好みが生まれてくる。自分の好きな声の練行衆による声明を、楽しみにする人も。

かの清少納言も「説経の講師は顔よき」（「枕草子」30段）と書いているくらいだから、こちらも日本の伝統だろうか。

ただし、あくまで法会なので、堂内で女性が入れるのは「局」まで。格子越しに堂内をのぞきこむが、行によっては、さらに白麻の戸帳がかけられていることも。それが冒頭のえりさんのように、内部での行の模様を想像する楽しみにもつながるようだ。

ちなみに、東大寺ゆかりの人々の名前を記した「過去帳」読み上げの際に「青衣の女人」というくだりがある。かつて、過去帳読み上げの際、青衣を着た女人がたちあらわれ、「自分の名前を読まないのはなぜか」と問うたという伝説があるのだが、現代の女性たちを引きつける魅力とどこかで通じているのかもしれない。

### 格子越しに香水を

また、聴聞者にとっては「参加感」を味わえる場面もある。「走りの行法」のあとにある「香水給り」だ。そもそも「お水取り」と呼ばれるようになったのは、二月堂下にある若狭井から観音様へお供えするための「香水」を汲み上げるという行に由来する。この香水を聴聞の人々にも配るのだ。女性は外の局から格子越しに手を差し出し、手のひらに香水を受ける。練行衆とともに祈ることができる得難い瞬間だ。

女性にとっては、魅了されつつも近づきがたい部分もあるお水取りを半世紀近く聴聞し、研究し続けてきた人もいる。東京文化財研究所名誉研究員の佐藤道子さんだ。

「お水取りは謎に満ちた稀有な法会です。仏教だけでなく、神道、修験道、密教、民間習俗まで、さまざまな要素が入っています。光の当て方によってどのようにも見えてくる奥行きの深さがある。今でも、うかがうたびに発見があります」

### 危機を乗り越え存続

お水取りは実に1260年以上、一度も途絶えることなく続いてきたと言われる。だが、危機がなかったわけではない。1180年、平重衡によって焼き打ちにあい、二月堂は延焼を免れたものの大きな被害があった。また江戸時代には二月堂が焼失する出来事も。だが物資が乏しい戦中戦後にも、人々の手によってお水取りは守られ、伝えられてきた。佐藤さんは語る。

「長い時の流れのなかで、この大行事がよくぞ残った、残してくださった、と思います。かつては身の回りにあった自然が失われ、松明を作る材料を集めるのにも、最近は苦労があるそうです。そうした変化の中でも、形を変えずに伝えていこうという、お水取りに関わる方々の姿勢が、人々の心をうつのではないでしょうか」

しかし、近年お水取りの魅力が喧伝されるにつれ、観光客などが見物気分で集まるようになったとの声もある。堂内に接する局にも観光客の団体が入り、行の途中で帰る場面もあるそうだ。

冒頭のえりさんは聴聞には必ず布の袋を用意するという。局に上がる際、脱いだ靴を入れるのに、ポリエチレンの袋だとガサガサと音が出て行の差し障りになるからだ。宗教儀式を聴聞するという自覚を、聴聞する側も忘れてはいけないだろう。

お水取りに通う人たちは「またお会いしましょう」と語り合うという。何もかもが速いスピードで変わっていく日本で、お水取りだけは来年も再来年も同じように開かれるという、信頼感があるからだ。

貴重な心の寄りどころを求めて、人はお水取りに集うのかもしれない。

ライター　矢内裕子

参考文献　佐藤道子『東大寺お水取り　春を待つ祈りと懺悔の法会』（朝日新聞出版）

### 修二会の主な行法の日程

| | |
|---|---|
| 3月1日 | ●午前1時頃　食堂で授戒（修二会期間中の作法や戒めを確認） |
| | ●午前2時30分頃　二月堂で開白【かいはく】（その年に最初に行われる行のこと） |
| 5日 | ●12時55分頃　数取懺悔【かずとりさんげ】（三千遍礼拝とも） |
| | ●19時40分頃　「実忠忌（修二会の創始者、実忠和尚の命日）」の法要 |
| | ●21時30分頃　大導師作法中、神名帳【じんみょうちょう】（日本全国の諸神の名）に続いて、過去帳（東大寺にゆかりの深い人々の名。「青衣【しょうえ】の女人」も登場する）を読み上げ |
| | ●午前0時40分頃　走りの行法、香水給【こうずいたば】り（聴聞者に香水が分け与えられる） |
| 7日 | ●18時15分頃　小観音出御【こがんのんしゅつぎょ】（下7日〈後半の7日間〉の本尊とされている小観音を二月堂内陣正面にお迎えする） |
| | ●午前0時50分頃　小観音後入【ごにゅう】 |
| 12日 | ●19時35分頃　籠松明【かごたいまつ】で上堂（点火した松明が練行衆を先導して上堂） |
| | ●21時10分頃　大導師作法中、神名帳に続いて過去帳の読み上げ |
| | ●午前1時55分頃　二月堂下の若狭井に香水を汲みに下る（この行をお水取りという） |
| | ●午前3時15分頃　咒師作法【しゅしさほう】（咒師が堂内を清め、呪禁する密教的な作法） |
| | ●午前3時35分頃　達陀【だったん】（堂司以下、8人の練行衆が松明を持って内陣で行う火の行） |
| 13日 | ●22時頃　咒師作法 |
| | ●23時10分頃　走り |
| | ●午前0時50分頃　達陀 |
| 14日 | ●18時30分頃　松明が10本そろって上堂 |
| | ●21時10分頃　咒師作法 |
| | ●23時55分頃　達陀 |
| | ●午前1時30分頃　破壇（堂内の須弥壇の設【しつら】えを解く） |
| | ●午前3時30分頃　神供【じんく】（咒師が神供所でおこなう修法） |
| 15日 | ●13時頃　礼堂涅槃講【らいどうねはんこう】、開山堂参拝、解散 |

**修二会中、毎日行われる行法「六時」**

一日を日中から夜明けまで六つの時に分け、日中、日没、初夜、半夜、後夜、晨朝【じんじょう】と呼ぶ。六時それぞれに悔過作法（これらをまとめて「時」とも呼ぶ）が勤められ、さらにその間に様々な法要や行事、作法が組み込まれている。

参考：東大寺ホームページ　http://www.todaiji.or.jp/

photo　朝日新聞社（上）　桑原英文（下）